

会報



第25号

編集・発行人 支部長 浅 子 逸 男

文学で学ぶ

二三ヶ月に一度、ファシリテーターとしてさまざまな肩書きの人とともに、小さな読書会のテーブルを囲む。街のカフェーで、ひとつの小説をめぐって疑問や感想を述べあう。参加者はランチを楽しみながら意見を交換し、自身の経験を語る。交通整理が私の主な役目である。

そういう時に強く思うのは、小説の解釈に素人も玄人もないということである。学会で論争になるような解釈のわかれる箇所、たとえば「春琴抄」で春琴に熱湯をあびせたのは誰かなどという問題が、たやすく議論にのぼるのである。そして誰かがあつさり佐助犯人説を唱える。初読時に感じた直感として、佐助が怪しいのではないかと。参加者を驚かそうとひそませていた私の隠し球はいとも簡単に見つけられてしまう。

山本 欣司

私は、教室で作品を読むことの意義もここにあると思う。さまざまな関心を持つ学生がそこにはいて、誰かが表現の裂け目に引っかけかりを覚える。それは勉強ができるできないに関わらず、センスの良し悪しでもない。純粹に確率の問題だと思う。多様な背景を持つ者が集うことの意義があらわれ、意見の交流を通じてテキストが思いもかけぬ姿で立ちあらわれるのである。

文系学部が存在意義について議論がかまびすしいが、私も含め、興味を感じるものしか勉強できないタイプの人間は大勢いる。文学は手頃で安価な嗜好品だが、面白いと思う学生にとって、は絶好の教材である。私たち教員の大事なつとめは、引っ込み思案の学生でもためらわずに意見が言えるような雰囲気を作ることである。

支部大会案内

二〇一七年度 春季大会 於・同志社大学今出川キャンパス

六月三日(土) 午後一時〇〇分～

【プログラム】

■開会の辞

同志社大学文学部教授 田中 励儀

■自由発表

安部公房「赤い繭」——変形する皮膚、変形する身体認識——

岩本 知恵

武田泰淳とJ・P・サルトル——『風媒花』における『自由への道』の影響をめぐって——

藤原 崇雅

■連続企画『《異》なる関西——1920・30年代を中心として——』
第四回「視差から立ち上がるもの」

趣旨説明・司会

田口律男・木谷真紀子

発表

・大阪朝日新聞神戸支局員と鯉川筋神戸画廊の活動から見えてくる神戸の文化空間

大橋 毅彦

・二人の五代友厚——直木三十五の「大阪回帰」をめぐって——

尾崎 名津子

・宣言としての言葉をどう再読するか——関西沖縄県人会機関紙『同胞』を読む——

富山 一郎

質疑および全体討議

■閉会の辞

支部長 浅子 逸男

〔自由發表要旨〕

安部公房「赤い繭」——変形する皮膚、変形する身体認識——

岩本 知恵

安部公房「赤い繭」（一九五〇年二月）は、家がないために休むことができず歩き疲れた主人公が繭へと変形する物語である。変形によってできた繭はようやく手に入れた「おれの家」であるのだが、この繭は「おれ」自身の身体が変形したものであるために「今度は帰ってゆくおれがいない」。こうした変形の顛末はこれまで、帰属のなさのメタファーとして、あるいは所有の問題として読解されてきた。しかしここで本発表が着目したいのは、変形が失敗したかのように描写されるという点である。

安部の変形譚について、岡庭昇や小林治は、変形は変質ではなく元来の身体の内方（うちかた）が顕在化／可視化したもの

だと述べている。これを受けて田中裕之（二〇〇三）は、変形するものそれぞれの特徴への着目を重要視し、「通常は比喩を形成すべきものがレトリックの次元を超えて実際に形象化されてしまう」ものだと述べる。また、谷川渥は安部の変形譚について皮膚との関わりの重要性を指摘している。皮膚が身体の世界として身体認識や自己認識を確定していくものであると捉えると、この指摘は興味深い。

本発表では、身体の変形を経験する主人公にとって変形は比喩ではなく、身体認識が変容しているのではないかという側面から変形を考える。一体何が主人公の変形（身体認識の変容）を誘発したのか、変形を介して獲得する認識はどのようなものなのか、そして変形が失敗したかのような描写が何を示しているのかについて考えたい。

武田泰淳とJ・P・サルトル——『風媒花』における『自由への道』の影響をめぐる——

藤原 崇雅

戦前期より紹介されつつあったJ・P・サルトルの文学や哲学は戦後、人文書院版全集が刊行されたことで人口に膾炙した。大岡昇平といった仏文学者から椎名麟三のような作家まで、多様な人々がサルトルを読み、その思想を受容していく。

武田泰淳も、この全集を読んだ一人である。中国文学研究会をめぐる身辺の状況が記された代表作『風媒花』（『群像』一九五二・一一―一二）の自注「私の創作体験」（中野重治ほか編『現代文学（2）』一九五四、新評論社）で彼は、「サルトルの『自由への道』のたいぶ影響を受け」た、と述べる。泰淳は『自由への道』全三部（佐藤朔ほか訳、一九五〇―一九五二、人文書院）を読み、それを踏まえ小説を創作し

た。この事實は先行論で指摘を受けているものの、詳細な比較検討はなされてはいない。本発表では『風媒花』と『自由への道』の影響関係の考察を通じ、戦後の日本文学におけるサルトル受容の一側面を明らかにしたい。

端的に言えば、泰淳はサルトル小説における、登場人物の現実認識の不可能性を表現する構造に注目し、自らの創作に用いている。泰淳にとってサルトルの文学は、単なる思想というよりも、小説の構成方法を知る契機としてあった。これは『自由への道』に、哲学的な思索を読み込む同時代の他の受容とは、異なったありようを示すものとして独自である。

なお、『風媒花』と『自由への道』との共通点および相違点を論証する過程で、中国文化の研究会に属している人物のモデルや、趙樹理『李家莊の変遷』（島田政雄ほか訳、一九五一、ハト書房）が引用されることの意味にも言及する。

〔連続企画第四回 趣旨〕 視差から立ち上がるもの

この連続企画の主眼は、一九二〇・三〇年代の関西の文芸文化を対象に、これまで見過ごされてきた人・風土・メディアなどを発掘しつつ、従来の「関西」表象や思考枠を問い直すことにあった。締め括りとなる今回は、その総括として、これまでの個別具体的な議論を踏まえつつ、やや広い視点から対象を捉え返してみたい。

両大戦に挟まれた当時の日本は、世界規模の経済的・社会的変動を背景に、急激な都市化を遂げつつあった。それに伴う社会基盤の変化は、そこに住む人々の生存の条件も変えていった。「関西」なる地理的概念も、そこに根ざす文芸文化も、そうした国内外の緊張関係のなかで吟味する必要があるだろう。

具体的には、第一次世界大戦や関東大震災がもたらしたものの、二〇年代か

ら三〇年代にかけての時代相の推移、「中央」・「地方」・「関西」の関係性、世界的同時性における都市モダニズムの影響、それらすべてが輻輳する関西文芸文化の傾向性など、問うべきことは少なくない。

また、それを担った当事者たちも一様ではなかっただろう。たとえば、関西出身でありながら、中央文壇とのかかわりで、戦略的に「関西」と向き合おうとしたもの。別の場所から関西に流着し、そこでの生活や労働を通して、表現の可能性を見出そうとしたもの。あるいは関西のメディアに関与し、みずから情報を発信しつつ、独自のネットワークを形成しようとしたもの、等々。それらが交差する地点を見定めるのも今回の課題となるだろう。「《異》なる関西」とは、さまざまな当事者の視差を通してしか立ち上がらないのではないか。連続企画の最終回に、発表者のみならず多くの参加者のなかから、「《異》なる関西」の片影が

立ち上ることを期待したい。

大阪朝日新聞神戸支局員と鯉川
筋神戸画廊の活動から見えてく
る神戸の文化空間

大橋 毅彦

前回の大会では、一九二〇年代の「大阪朝日新聞」神戸附録を通して見えてくる問題系が考察の俎上に上ったが、本報告の前半では、それを受け継ぐと思う。ただし、素材と考察角度はやや違えて、同附録の「雑草園」を主宰する岡成志・坪田耕吉・藤木九三といった神戸支局員らが、その後彼らの辿った経路が分かたれていったのとはある意味では対照的に、この時期、それぞれの才幹を生かして、どのように協働しながら、神戸の文化的土壌を耕す動きをとっていったのかを、「雑草園」の外にまで目を向けて考察する。具体的には、「神戸芸術文化聯盟」

の機関誌「おほぞら」（一九二四・三）の存在を注視する。

発表後半は、元大阪毎日新聞神戸支局員大塚銀次郎によって一九三〇年に鯉川筋に開かれた「神戸画廊」に集った詩人と画家との交流が、太平洋戦争の激化に伴って閉廊するまでの間において、いかなるムーヴメントを作り出していったかを、画廊機関誌「ユーモラス・ガロー」を基に考える。他紙（誌）からの転載も含めて、竹中郁・川西英といったお馴染みの書き手も登場するが、記事全体の傾向を見ていくと、そこにはハイカラな神戸と同居する異なった神戸のイメージも浮上してくる。また、「上海に馴染の深い連中」との関わりが気になってくる記事もある。北園克衛が主催する「VOU」同人の浅原清隆がこの画廊に関係している。どういう結論を導き出せるかわからないが、少なくとも「雑草園」の園丁たちの活動を通じて見られた時とは異なる種々の力線が神戸の文化空間を

走り始めているのを感じる。時間が許せば、「神戸版画の家」の存在や、同人の多くは西宮在住、しかるに寄稿家連の中には北園克衛、井伏鱒二、崎山猶逸・正毅兄弟がいる同人誌「薔薇派」、さらにまた小田実の小説「河」なども補助線として、この点を明らかにしたい。

二人の五代友厚——直木三十五
の「大阪回帰」をめぐる——

尾崎 名津子

直木三十五は大阪―東京を往還しながら生きた。その途上で、プラトン社の社員時代に本格的な創作活動を開始し、また、菊池寛との関係を礎として『文藝春秋』の常連寄稿者となることを通じ、作家としての地位を確立したといえよう。そうした在り方は、永井龍男に「たいていの人には其生国らしい雰囲気なり、習慣なりがあるものだ

が、直木さんにはそれが無い」「(『故郷の無い人』)と言わしめ、「放浪者」としての直木像を造形させもした。

いわゆる東京(文壇)の中心人物となった直木は、最晩年に幾度か大阪を題材として執筆した。それは山崎國紀が述べたように、「大阪回帰」(『知られざる文豪 直木三十五』)のようにも見える。具体的な著作に『大阪落城』や『大塩平八郎』(ともに1933年)などを挙げる事ができるが、本発表では『五代友厚』(1932年)を取り上げる。この作品は『直木三十五全集月報』第3号(1934年)の広告で「長篇小説」と紹介されているが、「私」＝直木による(大阪人)への説教、会話劇、史料の引用など、質の異なる記述が混在する構成を具えている。こうした方法や記述の分析から、直木が五代、あるいは大阪を要請するモチベーションの在り処を可視化してみたい。その際は「ファシズム宣言」との脈絡も問うことになるだろう。

う。

また、検討の際にはもう一人の五代にも登場してもらおう。それは、織田作之助『五代友厚』(1942年)である。東京(文壇)の当事者である直木と、(文壇)との距離において自らの位置取りを試みた織田、それぞれの視座を突き合わせたところに浮上する視差から、幻視された(関西)の姿が見えてくるのではないだろうか。

宣言としての言葉をどう再読するか——関西沖縄県人会機関紙『同胞』を読む——

富山 一郎

一九二〇年代以降の沖縄では、「蘇鉄地獄」と呼ばれるすさまじい経済的不況により、沖縄の外で生き延びることが常態化していった。この「蘇鉄地獄」は、グローバルな資本の再編過程に起因するものであり、アジア太平洋

戦争末期に宇野弘蔵が大東亜共栄圏における「広域経済」として議論している事態でもあるが、いずれにしても当時東洋のマンチェスターと呼ばれた大阪は、こうした沖縄から流れ出した人々の生きていく場となったのである。こうした人々は、その場を自らが生きる場として、どのように描き出していったのか。あえて大袈裟に言えばそこには、グローバルな資本の展開を自らの歴史としていかに獲得するのかわという問いがある。

沖縄を出た人々は、『同胞』、『大阪球陽新報』、『関西沖縄興信名鑑』、『沖縄県人住所案内』などの多くのメディアを生み出した。これまでこうしたメディアに所収されている文章は、社会運動や歴史研究の実証資料として用いられてきた。しかし報告では、こうした資料を、自らの生きる場を描き出し、なぜその場にいるのか、またその先どのような未来をつかもうとしたのかということを考える言葉として、受け

止めてみたい。その際、これまであまり検討されなかった、こうしたメディアに所収されている詩、歌、エッセイ、コラム、肖像写真、挿絵なども取り上げる予定である。先取りしていえば、こうしたジャンル横断的な表現は、現実の表象というより、「自分たち」と「生きていく場」を先取りしようとするある種の宣言ではないだろうか。それは沖縄からの流民たちが未決の未来に向けて歴史を確保しようとする言葉たちであり、報告ではそこに浮かび上がる大阪を、考えたい。

その際重要なのは、宣言において「自分たち」すなわち「我々」同胞」が先取りされようとするとき、刻印されていく傷があるということだ。それは神島二郎が「過去を語らない人々」と述べたことも深くかわる。周知のように神島は出郷した者たちが都市で作り上げる「自分たち」を「第二のムラ」と呼んだが、同時にこの「ムラ」に収まらない人々とその人々にお

いて抱え込まれた歴史があることを指摘しているのである（神島二郎『政治をみる眼』NHKブックス、一九七五年）。ここに宣言の宣言たるゆえんがある。宣言はやはり、無理に「我々」を創出し、歴史を獲得しようとする言葉なのだ。注視したいのはこの無理にかかわる強い思いであり、そして傷である。そこに別の言葉が始まらないか。再読において担いたいのは、この問いだ。

支部大会報告 二〇一六年度 秋季大会

一〇月二十九日(土) 於・甲南女子大学

■大会発表を終えて

〔自由発表〕

三島由紀夫『潮騒』論——初江に着目して——

福田 涼

まず貴重な発表の機会を与えて下さった関西支部委員の皆様や、会場の内外で御意見をお寄せ下さった方々に厚く御礼申し上げます。また、発表資料の準備を手伝って下さった大阪大学の後輩方にも改めて感謝申し上げます。

発表では三島由紀夫『潮騒』(一九五四年)を扱った。これまでの研究では閑却されがちであった副主人公・初

江の造型に着目して考察することで、彼女が一篇において果たしている機能を明らかにし、語り手が隠蔽する物語の奥行を闡明することに主眼を置いていた。それは『潮騒』に付き纏う平明かつ平板な物語という印象、すなわち「未知の、神秘の入りこむ余地が、どこにあるか」(服部達)といったイメージを相対化し、小説としての仕掛けを開示する試みであった。

ただ発表を終えた今の時点から振り返れば、全体として「初江が父の意向に背き、主体的に婿を選択する話」という線を強調し過ぎた結果、読解の幅や広がり自ら狭めてしまったように思われる。また質疑の際に御指摘を頂いたように、宮田の家と、歌島すなわ

ち共同体との関係性についての考察が甘かった。これらの課題については、活字化の際に改めて検討したい。

さて、当日は考察の補助線として石坂洋次郎『青い山脈』(一九四七年)に少しく言及したが、この小文では川端康成『伊豆の踊子』(一九二六年)に触れておきたい。これらの三作品には、六〇年代前半に為された二度目の映画化にあたって、吉永小百合がヒロインを演じたという共通点がある。さらに付け加えれば、彼女が映画版「愛と死を見つめて」(日活、一九六三年)の主演女優であったことも、「純愛の精神」(藤井淑禎)史を辿る上で示唆に富む。

三島は「伊豆の踊子」について、「静的な、また動的なデッサンによつて的確に組み立てられた処女の内面は、一切読者の想像に委ねられてゐる」と解説を施している(新潮文庫の解説「伊豆の踊子」について)、初出は一九五〇年)。そのことは、これま

での「伊豆の踊子」研究に於いて指摘されてきた、踊子（＝薫）を「稗史的な絵姿」に封じ込めたいという「私」の欲望と決して無関係ではなからう。

ここで興味深いのは「処女の内面」への焦点化を欠くという点が、まさしく『潮騒』の初江にも当て嵌まる反面、彼女の隠匿された内面が小説の語りそのものを突き崩すような強度を有していることであろう。思えば、『仮面の告白』（一九四九年）の園子や「鍵のかかる部屋」（一九五四年）に登場する九歳の少女・房子、更には『鏡子の家』（一九五九年）の真砂子、『暁の寺』（一九六八―一九七〇年）の月光姫といった「少女」たちは、しばしば物語にある種の陰翳をもたらし、あるいは男性主人公の主体を押し揺るがす存在として登場していた。映画の影響も相俟ってか、素朴さばかりが強調されてきた初江であるが、こうした「少女」たちの系譜上に再配置するとき、これまでは看過されてきた彼女

の「未知」なる側面が浮彫りとなってくるのではないか。このような見地から、引き続き考察を進めてゆきたい。

目取真俊「面影と連れて（うむかじとうちりてい）」論——沖繩という枠をはずれていくこと——

栗山 雄佑

今回の発表では、語り手となる主人公の女性の位置に着目し、沖繩という空間において生涯を語る女性がいかなる言説によつて消費されるか、そして空間から離れることで〈沖繩の女性〉と見做される自己を離れられるか、との考察を試みた。

この発表の内、目取真が描く〈性暴力を被る「沖繩の」女性〉という人物描写について、発表では明確に説明が出来なかったため補足を試みたい。性暴力、村からの疎外など様々な加害を受けた女性の生涯が当事者の独白で明かされていく形式は、「面影と連れ

て」、そして後年の「群蝶の木」より顕著になる。これを、目取真の他者の了解し得ない傷を小説によつて描写する試みとして評価する一方で、なぜ目取真がこのような女性の生涯を描出したのか注目したい。

まず、初期作品から『眼の奥の森』に至るまで、目取真が沖繩における性に纏わる問題を主題として描写してきたことを挙げておきたい。その上で、「面影と連れて」と同年に発表された「希望」と名づけられた掌編より、目取真の意識は変化していく。作品は、一九九五年九月に発生した米兵による少女暴行事件を下敷きに、主人公による少女の被害に対する報復行為が描かれる。だがこの作品は、主人公によって少女に加えられた暴行に対する反応として、暴力を伴う報復行為が有用であるとの視点を生み出す。

勝方＝稲福恵子は『おきなわ女性学事始』（新宿書房、二〇〇六年）において、実際の事件における怒りを提起

するための起爆剤として少女の被害が提起されていることを指摘する。この指摘を踏まえれば、目取真作品の中の女性の性暴力被害は沖繩のコロナアル的状况を訴えるために描出されたと言えるのではないか。「希望」の対抗暴力を目取真は「最低の方法」としているが、対抗行為に至る前に想起すべきなのは、「面影と連れて」、そして「群蝶の木」に表れた女性の声ではないだろうか。両作品において、被害女性は周囲の人物に対する憎悪を抱きつつも、その声は外部に表出されなかった。この声の想起からいかに呼応するか、といった困難な試みは、ときに加害者への怒り、報復という容易な解決に至ってしまう。目取真による女性の被害の描出は、見えない被害女性への想起を生み出すとともに、沖繩の被害者の描出と対抗暴力を導くために想起されたとの結論を導き出してしまうのだ。この対抗暴力を行使するための性暴力の被害という問題については、

後年の長編『虹の鳥』、『眼の奥の森』と併せて今後も考察を進めていく。

最後に、このような発表の機会を与えてくださった関係者の皆様、そして発表にご意見くださった皆様に厚く御礼申し上げます。

〔小特集・連続企画第三回〕

神戸近代文化研究会「光源としての『大阪朝日新聞神戸附録』——神戸モダニズムを問い直す」

光源としての『大阪朝日新聞神戸附録』

永井 敦子

今回、神戸近代文化研究会として、一九二〇年代の『大阪朝日新聞神戸附録』を精査し、大正期の神戸文化について発表させて頂いた。発表までの間、担当分野に関する記事を抽出しデータ化していったが、毎日相当量のPDF化された記事を隅々まで目を通

すのは集中力を要し、さらに論を展開していくのは困難な作業でもあった。何とか続けてこられたのは、『神戸附録』の持つ面白さ、豊穣さにあったと思う。自身の担当である「映画」に関して言えば、単に新作映画の紹介や上映館の一覧に終始するのではなく、阪神間に設立された撮影所の撮影状況や俳優たちの紹介（ゴシップも含め）など話題に富み、当時の映画製作の動向も分かり、純粹に楽しめた。

発表では、「労働運動」「映画」「建築」「美術」の四分野に関して報告した。「労働運動」（仙谷英紀）では、神戸で開設された二つの労働学校の特色や関西学院ゆかりの講師陣について、『神戸附録』や労働関係の諸雑誌から明らかにした。「映画」（永井）では、神戸で上映された映画と新聞のメディアミックスや、メディアイベントの有り様を紹介した。「建築」（高木彬）は、阪神電鉄が先導した全国の住宅改良運動のモデルとなった阪神間の「理

想住宅」が発展し、過渡期を迎える様相を跡付けた。そして、「美術」（島村健司）は、神戸における前衛芸術の広がりを郷土芸術として包含する側面を指摘し、ロケーションとして神戸を捉える眼差しを、「スケッチの会」などの記事から摘出した。発表では各分野が独立して行ったが、それぞれがどのように関わり紙面を構成しているか、情報を共有していきたいと思う。

発表後は、様々な角度からのご質問を頂いた。その中で、神戸の地元紙と『神戸附録』の相違点や、読者層についての質問が挙がった。『神戸附録』の特徴として、地元紙に比して文化的な記事が多いことが挙げられるが、当時の大阪朝日の体制と、その地方版である『神戸附録』がどうリンクするか考察することで、他紙との相違点や『神戸附録』の独自性を見ることは可能だろう。また、読者としてターゲットトにしていた階層を説明することは、摘出した記事の解釈にも繋がる。これ

らの点を留意し、更に調査を進めていきたい。

最後に、グループ発表の機会を与えて下さった関西支部の皆様、司会をして頂いた三品理絵さんに感謝申し上げます。会場ではご意見や励ましの声を頂戴した。皆様に心より御礼申し上げます。

■大会印象記

自由発表

金岡 直子

当日は秋にしては日差しも強く、坂を登ってすぐの人たちの体温がそのまま会場の熱気につながったのか、自由発表から活発な意見交換・質疑応答が行われた。

福田氏「三島由紀夫『潮騒』論——初江に着目して——」は同時代論の整

理から始まり、作中の恋愛描写のなかで初江の情報が限られる点と、二人の幼い「初恋」を主導せしめるのは初江であることを確認した。そして初江の精神的優位性と、その優位性の原因となる女らしさを決して語らない「隠蔽」とを論じたのだが、そうした「戦略」が本作品に存在したのであれば、恋愛対象である新治だけではなく、同世代の安夫に対しての初江はどうだったのか、といった相対的な読みを挿入してほしいと思われた。いずれにしても新治と初江との二人が中心に据えられた神話的世界に少々引きずられた印象があり、質疑にもあったように、三島の他作品との関連、三島独特の恋愛の描写方法、共同体への視点など別角度からの読みも提示すればより重層的な展開があったのではないだろうか。

栗山氏「目取真俊「面影を連れて」論——沖繩という枠をはずれていくこと——」は主人公が、生前に言葉を発しなかった点に注目しつつ、一方的な

自由発表

杉岡 歩美

被害者ではない沖縄の現実と言及した発表であった。主人公が沖縄から離れた場所であろうと出せた声に、栗山氏はゆがんだ沖縄の言説の重層と、語れない暴力の内在をみる。決して一枚岩ではない沖縄の言説に気づかされる発表であったが、沖縄を取り巻く思想の潮流を整理してもらえたら、もっと論点はクリアであつたらうと感じる。一

昨年に支持を集めた基地問題に対する統一戦線「オール沖縄」が急激に失速している現状をみると、沖縄文学の背後にある思想の葉脈を丁寧を追う作業は不可欠なのではないか。質疑で「東アジアの視点を」と指摘があつたように、今後「沖縄」という枠から離れ、沖縄の複雑さを我々文学研究者はどの立場で、どの手法で読み解くのかも明示していかねばならないだろう。沖縄を文学の題材にする場合の難しさに触れた発表であつた。

二〇一六年度秋季大会は、一〇月二十九日（土）、甲南女子大学にて開催された。前半に二本の自由発表が行われた。それらに関して、感想を述べさせていただきたく思う。

福田涼氏のご発表「三島由紀夫『潮騒』論——初江に着目して——」に関して。福田氏は「清純な恋愛小説」として文壇で評価がわかれた三島由紀夫『潮騒』を取り上げ、初江の描かれ方に着目し考察を加えられた。初江の仕事から、彼女の精神的優位性を読みとり、さらに、手紙を書いたり、自身の写真を相手に送つたりといった行為から、初江が「恋愛」に関する文化的なコードを諒解し、「作法」を会得している人物だと指摘した。そのうえで、初江の内面がブラックボックス化、神話化される様を見出した。今回のご発表では、さまざまな問題点が提起され

た印象を受けた。「教養」や「恋愛」、「古代」など広範な見地からの解釈が行われたように思う。そのためか、質疑応答が活発になされた。なかでも、レジュメに論文が引用された梶尾氏、佐藤氏とのやりとりは興味深いものであつた。初江の接吻の場面から三島の他の作品に通じるモチーフが見られるのではないか、そもそも初江の内面はそれほど隠蔽されていないのではないかなど、指摘がなされた。少し残念だったのは、課題として残された回答が多かつたことだろうか。今後の展開に期待したい。

次に、栗山雄佑氏のご発表「目取真俊『面影と連れて』論——沖縄という枠をはずれていくこと——」に関して。レジュメは、各章ごとに文章化され、展開もわかりやすかつた。全体を通して、丁寧な分析がなされた。栗山氏は、死者の語りにのみ目が向けられてきた先行論に対し、魂になった主人公が生前に自らの言葉を発することが少

発表に期待したい。

小特集

山本 歩

なかった点に着目した。主人公が、学校から疎外され、男性から性的欲望に曝されてきたことから、自己の加虐性に無自覚な沖縄の姿が描かれていると指摘、生前主人公が言葉をあまり発しなかった様に、抵抗・抗議の沈黙を見出した。また、本土のイメージを内包した沖縄や、「沖縄女性」という立場から離れることでしか語り得ない様を読み取った。質疑応答は丁寧になされた。伝達は不可能なのか、誰への沈黙なのか、なぜ主人公は語り得たのか、など多様な角度からの質問が呈示された。「文学でしか語り得ない」のは何故かなど、「語り」に関する検討ももっと聞いてみたいと思った。

福田氏、栗山氏いずれの発表においても、盛んな討議がなされ、さらなる進展が楽しみな発表となった。

なお、発表が予定されていた森瑠偉氏の「司馬遼太郎「世に棲む日日」と本当らしさ」が諸事情により行われなかったことは残念であった。今後のこ

連続企画「^いへ異」なる関西」、第三回の発題は神戸近代文化研究会による「光源としての『大阪朝日新聞神戸附録』——神戸モダニズムを問い直す——」となった。神戸近代文化研究会

は「主にモダニズムという視点からなされてきた海港都市神戸の文化についての考察を、一般市民の生活や芸能や大衆演劇などの存在を踏まえ、より多層的な視点から捉えなおすこと」を目的に掲げている。その一環として今回は、「大阪朝日新聞」の兵庫県版である「神戸附録」（一九二五年四月には「神戸版」に改称）を取り扱っている。

柚谷英紀氏の報告「結節点としての労働学校・関西学院」は「神戸附録」労働運動関係記事を扱ったもの。帝大新人会、キリスト教、社会学。東京か

ら流露した思想・宗教・人材が、神戸労働学校・関西学院を結節点として結ばれた、ネットワークの有様が洗い出されていた。「神戸を流動する文化の結節点として捉える」とは研究会のねらいの一つであるが、報告は「神戸附録」を中心とした資料により、それを詳細に提示したものだった。

続く永井敦子氏は映画関係記事を扱い「一九二〇年代半ばの『神戸附録』映画情報——新聞連載小説の映画化を中心に——」として報告。朝日本紙連載小説の映画化は、大きく扱われるのみならず、割引券の配布や読者参加型企画によって盛り上げられた。神戸における映画熱の高まりは、「修羅八荒」公開時に出演者も交えた討論会が催された（全国関西日活倶楽部による）ことから明らかで、単なる鑑賞者の枠組みを越えた、映画研究の主體的な流れが生まれていたようだ。

高木彬氏「理想住宅」と「煌ける城」——一九二〇年代・神戸の建築空

間をめぐる——」で「神戸附録」が果たした役割は、阪神間における「理想住宅」建設推進を紹介しつつ、その「繁雑と混乱」から距離を取ること、過半の読者と共にその「理想」を冷めた目で眺めることだった。阪神・阪急電鉄が示した「健康地」戦略を黙殺し、記者は独自の立場を保っていたことになる。

島村健司氏は「前衛芸術と郷土芸術——神戸一九二〇年代文学の後景——」で美術関係記事を辿る。「前衛芸術」と並行して用いられた「郷土芸術」（神戸を地元とする者の芸術）という包括があり、「神戸附録」もそうした「神戸の文化を向上せしめ」とする動きに加わっていたようだ。読者参加型の企画「スケッチの会」には前衛芸術家集団「コルボー」が参加し、神戸という「郷土」への芸術振興が「前衛」を通して行われた様、すなわち二つの包括が合流する様が見て取れる。

四報告を受け、質疑応答も活発に行われた。全てを記す紙幅はないが、総じて媒体と記者の実態や、「神戸」というローカリティーを軸とした、クリティカルな質疑がなされた。「神戸附録」の文化的記事は、支局の戦略以上に、各記者の興味関心・バイタリティーに由来するところが大きいようだ。ではそこに「神戸」の文化振興を担う矜持が、換言すれば独自の文化色志向されていたのか、という点はとりわけ興味深かった。

海港都市という地勢を活かした文化振興、という統一的な志向は無論伺える。しかし各報告を聞いた上で、個人的に面白味を覚えたのは、その混沌・混沌ぶりである。この場合の「混沌」は消散や離散に繋がるものではなく、やがて「物が寄り集まる」ことを予期させるものである。少なくともジェームズ・マックファーレンは「モダンイズムの精神」について述べる中で、混沌の中で働く「求心力」「統合の力」を

強調した（『モダンイズム I』、橋本雄一訳、一九九〇年五月）。岡成志・片岡鉄兵・藤木九三——中心記者たちも神戸の外から移ってきたのであり、「神戸附録」自体、「寄り集まって」形成されたものと言える。労働運動も、映画研究も、建築も、郷土芸術も、等しく趣味として寄せ集める。記者たちが作り出した混沌は、「神戸」というよりも「自らの居場所」をより楽しくする、という動機があったようにも感じる。ともかく、そのような混沌、大きく結実せず、歴史ともならなかった可能性の数々、それらを発見できる資料として「神戸附録」は非常に魅力的である。

小特集

荒井 真理亜

二〇一六年度秋季大会では、連続企画『異』なる関西——一九二〇・三〇年代を中心として——の第三回

「光源としての『大阪朝日新聞神戸附録』——神戸モダニズムを問い直す——」というテーマで、神戸近代文化研究会のメンバーである四氏の発表があった。

神戸近代文化研究会は「港湾都市神戸の独特の文化をそれまでの阪神間モダニズムとは違った視座から研究すること」を目的にするという。今回の発表は、「多層的に神戸の文化を吟味し直す」ために、「多層的なものを発信する『神戸附録』を取り上げ、そのような記事を編み出す神戸支局員の立ち位置や活動を明らかにしたものである。

仙谷英紀氏の「結節点としての労働学校・関西学院」では、一九二〇年代に神戸の新たな労働環境が整備されていく中で、サンディカリズムの流れとは異なる無抵抗主義および教養や徳育を付与しようとする『神戸附録』の論調が確認された。

永井敦子氏の「一九二〇年代半ばの

『神戸附録』の映画情報——新聞連載小説の映画化を中心に——」では、神戸における映画制作や配給の状況が提示され、新聞小説の映画化にあたり『神戸附録』の記事が仕掛けていく読者参与の具体的な戦略が明らかになった。

高木彬氏の「理想住宅」と「煌ける城」——一九二〇年代・神戸の建築空間をめぐって——」では、『神戸附録』の記事が理想住宅への消費欲を煽る一方で、理想住宅を手の届かない「理想」へと還元するはたらきを有していることが指摘された。

島村健司氏の「前衛芸術と郷土芸術——神戸一九二〇年代文学の後景——」では、『神戸附録』から神戸における前衛芸術の浸透と郷土芸術の振興が同時期に展開し、接点を持ち得たことが見て取れるという。

各発表によって、『神戸附録』の労働者層との向き合い方、映画という娯楽を求める大衆読者層への働きかけ、

労働者とは異なる市民を誘うあり方、芸術文化を享受する層への働きかけが提示された。確かに「各階層に向けた記事」から『神戸附録』の多層的な性質が見えてくる。

発表の中で、しばしば「読者」という言葉が使われていた。質疑応答では『神戸附録』の読者について議論になった。高木氏の発表でも触れられていたように、阪神間には大阪から移住した人が多かった。職住分離が進み、職場は大阪、住いは神戸の郊外という人が増えたのである。『大阪朝日新聞』が神戸支局を置き、『神戸附録』を發刊したのは、そのような人の移動と無関係ではないだろう。今回の特集では『神戸附録』に焦点が絞られていたことで、一九二〇年代の神戸の文化状況が浮き彫りになった。その独自性がより鮮明になるためにも、今後の研究で本紙との関係、他の附録との相違が明らかにされることを期待する。

木村 功著

『病の言語表象』

田中 キヤサリン

本書は、病と文学を論じた貴重な研究書であり、著者の深い知識と幅広い視点は称賛されるべきだろう。第一章から第三章ではハンセン病、第四章と第五章ではHIV／エイズ、第六章と第七章では精神病、第八章では癌、第九章では障がい、それぞれ論じられている。ややアンバランスな印象を受ける構成ではあるが、全体を通して「病」の表象の共通点を浮かび上げながら示唆に富む。特に、数多くの作品（文学、エッセイ、映画など）を取り上げながら病の言語表象が探求されている。

一方、その幅広さ故に分析に深みを欠く点も見受けられる。例えば、近年の廣川和歌氏は「絶対隔離」の歴史を再検討し、ハンセン病への対策が複数存在した事実を明らかにしているが、

本書では「絶対隔離」の認識は従来通りに論じられている。また、北条民雄や明石海人といった典型的なハンセン病文学作家を取り上げたことで、かえってハンセン病文学の多様性が見えにくくなっており、マイナーな作家への目配り・考察も必要ではないかと感じた。北条や明石は典型的な作家であつたからこそ「病」のイメージを構成できたのだが、ハンセン病作家としては特別な扱いを受けた彼らの「病」のイメージに反対した作家も少なくなつたのである。

とはいえ、本書は文学研究のみならず、社会学、歴史学、言語学といった幅広い分野の研究において参照されるべきだろう。病の研究においては、サnder・ギルマンの著作のような例外もあるが、特に日本では、一つの病に

注目してその病をめぐる文化史や表象の特徴を検討する傾向があり、福田真人氏の結核と梅毒に関する著書などはその一例である。このような病の個別の取り扱いはそのらの病の間にある共通性を見えにくくし、個々の病の特性を強調する傾向が強まる。その点において、本書が病を幅広く取り上げたことは重要である。

病に限らず、社会において脅威や恐怖はまさに言語によって表象される。言語は、現実に対する、私達の考え方や行動に深くかかわっている。今日、本書で扱われているような「言語表象」は非常に重要な研究分野になっている。本書の主旨の一つは、言語表象が実際の社会における差別や偏見とどのように繋がっているかを示すことにあるが、現在の世界的な政治情勢を考えると、本書は非常にタイムリーで、病と文学の研究に重要な一歩を踏み出した本書の続論が期待される。

（二〇一六年四月一日 和泉書院
二五四頁 三五〇〇円＋税）

真銅 正宏著

『触感の文学史 感じる読書の悦しみかた』

田村 美由紀

言語芸術である小説は、そこに記された文字記号が読者の想像力を經由してイメージに変換されることで、はじめて映像や音や匂いを伴った作品世界として立ち上がる。しかし、著者はこのような読者の再現力に対して次のように問いかける。「我々は今、読書という行為の最中に、そのような身体感覚を駆使して、この想像力の再現を楽しんでいるであろうか」と。本書の狙いは、現代の視覚偏重主義に警鐘を鳴らし、とりわけ昨今失われつつある触感という原始的な感覚の手ざわりを読書行為のただ中に取り戻すことにある。取り上げられる作家は永井荷風、

谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫から川上弘美、金原ひとみに至るまで多岐にわたるが、著者は細部の感覚表現

を緻密に読み解くことで、ストーリーや主題のみに注目する読書ではおそらく捨象されてしまおう作品の豊かな相貌を鮮やかに紡ぎ出していく。

第Ⅰ部「小説に描かれた「身体」と触感」では、テクストの言葉と読者の想像力が交差することで触感が再現される過程を実践的に示しつつ、視覚要素を抑制することによって構築される触感的な身体表象の方法的側面を明らかにする。第Ⅱ部「人と人との触れ合い」では、男女の出会いや性愛の空間、あるいは幼子との触れ合いといった人同士の具体的な接触の場に焦点を当て、同時代の世相や風俗、医学的な言説の中に感覚表現を配置することで人間関係の機微とその描かれ方を検討する。第Ⅲ部「フェティッシュの誘

惑」では、足や肌といった人間の身体部位に対するフェティッシュなまなざしを対象との距離の力学において捉え直すと同時に、兎や蛇という生物が持つイメージの分析を通してより多角的な視点から触感描写の表現効果とその可能性を浮き彫りにする。

スマートフォンやタブレット端末など電子メディアの発展にますます拍車がかかる現在だからこそ、著者の抱く危機感は切実に響く。受容理論に基づいた著者の分析は読書行為のシステムそのものについても再考を迫るが、感覚描写を想像的に再現するメカニズムは読者が置かれた文化的な環境とも決して不可分ではない。視覚優位の現状に一石を投じ、触感という身体感覚の復権によって小説受容の新たな地平を切り開こうとする本書は、今後ますますその重要性が高まるであろう示唆に富む一冊である。

(二〇一六年四月五日 勉誠出版

二八八頁 二八〇〇円+税)

飯田 祐子著

『彼女たちの文学——語りにくさと読まれること——』

泉谷 瞬

「女性作家は〈女性〉を代表しないということ」(六頁)——本書はこうした認識を掲げた上で、「語る主体の亀裂や、語りに滲む〈語りにくさ〉」が、

発話のポリティクスへの批評性と他者への応答性という倫理的可能性を持つこと」(一六—一七頁)の理論構築に取りかかる。その中で最も特筆すべき点は、「応答性」と「被読性」という概念が採用されたことだろう。

「応答性」は、自己をオリジナルと措定する限りでは成立しない。自己を起源とすることの不可能性に基づきつつ、その一方で、他者からの「呼びかけ」への反応に視点を移すことで立ち現れるものである(これはジュディ・バトラーの文章に依拠した概念であり、規範の再生産と失敗という二項

対立にすぐさま回収されがちなこの理論に関して、その前段階で留まろうとしている著者の姿勢(三二七頁・注四)には敬意を払いたい)。

また「被読性」とは、複数の読者にテクストが読まれる事態そのものに、注意を促す概念である。換言すれば、同じテクストであろうとも読者が複数存在する以上、そこには肯定的／否定的、あるいはそのどれとも異なるかもしれない複数の受け取り方が必然的に想定される。「被読性」は、まさにこうした複数性こそが書き手を敏感にさせ、その統一的な主体性をずらしてしまような状態を指している。このことは、ときに書き手へのジェンダーを伴った抑圧に繋がる危険を意味するものの、しかし同時に、そこからは書き

手による複数の他者への倫理的責任も発生し得ると著者は述べている。

これら二つの概念がもたらす語りの矛盾や言い淀み、あるいは沈黙といった振る舞いが、テクストの「完成度」に対する評価を下げる恐れを予期しながらも、むしろそうした「亀裂」自体に光明を見出す本書の構えは一貫して鋭い。紙幅の都合上、全ての論について記すことは叶わないが、特に第五章の松浦理英子『裏ヴァージョン』論は、この「応答性」と「被読性」の活用がいかに発揮されており、本書の理論的達成を如実に証明した必読の内容となっている。さらに評者の勝手な理解を加えれば、ここで提起された異なる文脈のすり合わせ(二二六頁)という試みからは、もはやテクスト内の分析を越えた形で、従来の「美学的基準」(九四頁)による是非すらも更新する可能性を感じた。

(二〇一六年四月一二日 名古屋大学出版会 三七六頁 五四〇〇円＋税)

廣瀬 陽一著

『金達寿とその時代——文学・古代史・国家』

山本 昭宏

本書は、金達寿という一人の小説家・知識人を通して近代東アジア思想史という趣を持つ。著者は、「日本と朝鮮との関係を人間的なものにする」という金達寿の実践のなかに、誰もが当然視している言説空間を根底から問い直す鋭い視座が存在した点を重視し、金達寿の全体像を記述しようと試みた。以下、各章を概観しよう。

金達寿は一九五〇年代の文学的葛藤をへて、七〇年代から活動の重心を古代史に移し、八一年に完結した長編『行基の時代』の発表後に文学活動を止めた。第一章では彼の生涯が整理される。

第二章では、金達寿が「朴達の裁判」の執筆を通して、自然主義リアリズムの文体から「現実を能動的に変革

し得る新たなリアリズムの文体の確立」へと移行しようと試みる過程が描かれる。

続く第三章では、国家や組織との関係が問われる。金達寿は、一貫して反韓国・親北朝鮮系の組織に所属した。しかし、一九八一年の韓国訪問を契機に、韓国を肯定的に評価するに至る。金達寿の態度変更の過程を緻密に跡付ける第三章は、「転回研究」への関心から研究をスタートさせた著者の真骨頂である。

最後の第四章では、文学活動と古代史研究とを架橋する金達寿の姿が記述される。彼の古代史研究の意義は、「帰化人史観」を批判し、「渡来人」という用語の使用を促したことにある。日本人は、古代の「帰化人」を、マ

ジョリティーとしての自分たちと結びつけるのではなく、在日朝鮮人や被差別部落民などのマイノリティーと結びつけてきた。こうした理解が、日本と朝鮮の相互理解を阻んでいるのではないかと問うたのである。

内容の紹介で紙幅が尽きたが、最後に一点。研究書の冒頭では、先行研究の批判が行われるのが定石で、そこが読みどころでもある。本書はそこで韓国の研究も含めた先行研究を読みやすく整理しており、とても面白かった。

「総合的研究」と呼ぶにふさわしい本書は、「書き・読む」という文学的実践によって、社会と切り結び、自らの認識を深めた知識人の全体像を提示することに成功している。加えて、本書には、常識的な「日本」を相対化する要点が散りばめられている。今日的な意義を持つ、すぐれて「金達寿的」な研究書である。

(二〇一六年五月一日 クレイイン
四七二頁 三〇〇〇円＋税)

会議の記録（二〇一六年度）

四月二十三日（土）

【運営委員会】二〇一六年度春季大会について（プログラム、タイムテーブル、当日の運営について、印象記執筆者の確認、役割分担）、連続企画の今後の計画について、二〇一六年度秋季大会について（第三回企画内容について、自由発表公募について、今後のスケジュール）、会計報告・予算について（二〇一五年度会計報告、二〇一六年度予算案、二〇一六年度関西支部運営特別基金予算）、会報第二四・二五号について（編集について（進捗状況・スケジュールなど）、第二四号書評対象図書、第二五号書評対象図書）、委員の役割分担および負担軽減について（役割の決定、チーフ制の導入および役割のマニユアル化について）、二〇一六年度年間スケジュールの確認、「会報」第二三号送作業。

〔武庫川女子大学〕

六月四日（土）

【運営委員会】総会について（議長候補の選定）、会計報告・予算について、会報について（スケジュールの確認、第二四号誌面構成について、第二五号書評・紹介対象図書・執筆者について）、連続企画「異なる関西」について（第三回について、二〇一七年度春季大会（第四回）にむけての準備進捗状況）、その他（作家／作者とは何か（和泉書院）掲載許可の使用料、今後のスケジュール、二〇一六年度役員、会員異動等）。

【総会】新運営委員紹介、二〇一五年度事業報告、二〇一五年度会計監査報告、二〇一六年度事業計画、二〇一六年度予算案。
〔花園大学〕

七月三十日（土）

【運営委員会】二〇一六年度秋季大会について（連続企画について、タイムスケジュールについて、自由発表について）、二〇一七年度春季大会につい

て（日程および会場校について、会場校への連絡・スケジュールの確認について）、連続企画について（第四回企画内容について、第四回プログラムについて、第四回企画ワーキンググループの結成について、今後のスケジュール・方針）、会報第二四・二五号について（現状報告および編集スケジュールの確認、原稿内容確認および校正、書評対象図書、印刷会社の選定）、その他（企画第一回・第二回シンポジウムでの文字起こしにかかる費用について）。

〔武庫川女子大学〕

九月十七日（土）

【運営委員会】二〇一六年度秋季大会について（タイムテーブルの確認、会報等印象記執筆者依頼、役割分担）、二〇一七年度春季大会について（プログラムについて、自由発表者の募集について）、二〇一七年度春季大会企画（連続企画第四回）について（企画案について、スケジュールの確認）、会

報二五・二六号および書評について
(第二五号進捗状況、書評候補について、浅子支部長の任期について、「会報」第二四号発送作業。

〔武庫川女子大学〕

十月二十九日(土)

【運営委員会】二〇一六年度秋季大会について(タイムテーブルの確認、印象記執筆者の確認、役割分担、特集企画の確認)、二〇一七年度春季大会について(連続企画「《異》」なる関西——1920・30年代を中心として——、自由発表者の公募について、発表題目および要旨のメ切確認)、連続企画第四回について(企画趣旨文の最終確認、登壇者の人選について、今後のスケジュール)、連続企画「《異》」なる関西」出版原稿依頼について、「会報」書評執筆者について、新運営委員の人選について(運営委員の交代について、運営委員長の交代について)。

〔甲南女子大学〕

十二月十七日(土)

【運営委員会】二〇一七年度春季大会について(連続企画「《異》」なる関西——1920・30年代を中心として——、自由発表者の公募について、発表題目および要旨のメ切確認、タイムテーブル)、二〇一七年度秋季大会について(プログラムについて)、連続企画出版について(《異》なる関西」出版について)、新年度体制について(新運営委員の定数について、運営委員長の交代について、新委員候補)、会報について(第二五号発行スケジュール、第二五号の紙面構成、ならびに原稿入稿状況について、第二六号掲載の書評対象図書と書評予定者について)、その他(新入会員)。

〔武庫川女子大学〕

二月十九日(日)

【運営委員会】会報編集作業と確認(「会報」第二五号編集作業について、第二六号書評対象図書について、第

二七号以降での書評対象)、二〇一七年度春季大会について(自由発表、連続企画「《異》」なる関西(第四回)、小特集「視差から立ち上がるもの」、タイムテーブル案、今後のスケジュールその他)、二〇一七年度秋季大会について、二〇一八年度春季大会について、新年度運営体制について(運営委員の退任と補充について、次期運営委員長に関して、次年度以後の役割分担に関して、運営委員会の引継ぎについて)。

〔武庫川女子大学〕

三月二十五日(土)

【運営委員会】会計報告および予算案について(二〇一六年度会計報告について、二〇一七年度予算案作成に向けて)、二〇一七年度春季大会について(自由発表、連続企画「《異》」なる関西(第四回)・小特集「視差から立ち上がるもの」、タイムテーブル案)、二〇一七年度秋季大会について、会報について(第二七号以降での書評対象

等）、『《異》なる関西』出版に向けた
取り組みについて、新年度運営体制に
ついて（運営委員の退任と補充につい
て、次期運営委員長に関して、次年度
の役割分担に関して、運営委員会内
での引継ぎについて）、関西支部の今後
の取り組みについて、その他（次回運
営委員会議題（案）、事務局・斎藤理
生、今後のスケジュール）。

〔武庫川女子大学〕

*二〇一六年度役員

支 部 長 浅子逸男

運営委員長 山本欣司

運営委員 天野知幸 泉谷瞬

岡村知子 加藤邦彦

木谷真紀子 斎藤理生

坂堅太 重松恵美

須田千里 関肇

高橋幸平 瀧本和成

田口律男 田中裕也

戸塚麻子 中谷いずみ

西山康一 福岡弘彬

ホルカ・イリナ

増田周子 三品理絵

山田哲久 山本昭宏

和田崇

事務局便り

○献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

●対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

●送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○維持会費納入のお願ひ

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。同封の振込用紙で、ご協力のほど、何卒よろしくお願いします。

○関西支部二〇一七年度役員（＊は新役員）

浅子逸男（支部長） 斎藤理生（運営委員長） 泉谷瞬 ＊磯部敦 ＊奥野久美子 ＊梶尾文武 加藤邦彦

木谷真紀子 ＊黒田俊太郎 坂堅太 重松恵美 瀧本和成 田口律男 田中裕也 戸塚麻子 中谷いずみ

福岡弘彬 ホルカ・イリナ 増田周子 三品理絵 ＊村田好哉 山本昭宏 ＊山本歩

○日本近代文学会関西支部事務局

〒560―8532 大阪府豊中市待兼山町1―5 大阪大学大学院文学研究科 斎藤理生研究室内

（※事務局が変更となりましたのでご注意ください）

二〇一七年度 関西支部秋季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇一七年度秋季大会における自由研究発表を募集いたします。支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

日時・会場 二〇一七年十一月一日（土） 会場・近畿大学 東大阪キャンパス

※詳細は決定次第、関西支部HPでお知らせいたします。

募集人数 四、五名

応募締切 二〇一七年七月一日（月） 必着

応募要領 発表題目および六〇〇字程度の結論まで書かれた要旨を封書でお送りください。

必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。

発表時間は三〇分程度です。

採否については、運営委員会で決定次第お知らせいたします。

発表に関してご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】

〒560-8532

大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学大学院文学研究科 斎藤理生研究室内

日本近代文学会関西支部事務局